

[2] 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：4 題	解答数：24 問
問題の分量（対昨年比）	○ 多い	○ ほぼ同じ ● 少ない
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし
<p>総評</p> <p>例年通り、物理 I の全範囲から満遍なく出題されていた。昨年は定量的な（2 次試験的な）出題が例年に比べ増加したが、その反動か、今年は定性的な出題が多く見られた。</p> <p>熱量計算に代表される複雑な計算の出題がほとんどなかった。数値計算を苦手とする受験生は多いが、そういった意味では安心して問題を解けた人が多かったのではないだろうか。</p>		

[3] 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	<小問集合> 波の反射 力学的エネルギー保存則 誘電分極 音波の屈折 剛体のつりあい エネルギーの単位	31 点	熱に関する出題が問 6 にしかなく（と言っても単位に関することだけだが）全範囲に渡って力を入れて学習してきた受験生にとっては物足りなく感じたのではないだろうか。 フックの法則が問 5、問 6 で重複しており、さらに、第 4 問 A とも重複している。問 6 は 6 点と高配点となっている割には、単純な単位を選ばせる出題となっている。
第 2 問	<電磁気学> A：非線形抵抗 B：電磁誘導	20 点	A：特性曲線を上手に利用して解くべき、非線形抵抗の標準的な出題である。 B：電磁誘導現象を定性的に理解するものとして「うず電流」は最適なテーマである。類題を経験したことがない受験生はとまどったかもしれない。
第 3 問	<波動> A：レンズ B：音波の干渉	20 点	A：問 1 はレンズの作図を思い出せばすぐに正解を選べたのではないだろうか。問 2 は網膜・角膜の言葉に惑わされることなく、レンズの公式を普通に適用すれば良い。 B：昨年も同様に球面波に関する出題であったが、干渉縞の形状に関する出題ではなく、干渉に関する一般的な出題であった。問 5 では文章を良く読まない勘違いをしてしまう表現があり、注意が必要である。逆位相に関する出題は昨年に続く、2 年連続の出題であった。
第 4 問	<力学・熱力学> A：力のつりあい 力学的エネルギー保存則 B：運動方程式 C：気体の状態変化と水圧	29 点	A・B ともに、力学の一般的な出題であった。問 4 は定性的に考えて解くことも可能である。 C：類題の経験で大きく差がついたであろう。2004 年度追試験に同様の実験設定がある。